

P-183 高テストステロン血症を呈した
卵巣間質性Leydig細胞腫瘍の臨床病理学的検討

神戸大, 同第一病理*

竹内 聡, 石原尚徳, 山本 幸, 梅本裕美子,
浜名伸也, 佐本 崇, 丸尾 猛, 望月真人,
伊東 宏*

若年女性に発生した間質性Leydig細胞腫瘍につき報告する。本腫瘍は極めて稀な卵巣腫瘍であり、全世界での報告例は8例しかない。

[症例] 24才, G0P0。主訴は声の低音化および続発性無月経。他覚所見では男性型陰毛, 陰核肥大および約6cm径の充実性左卵巣腫瘍を認めた。腫瘍マーカーは、全てcut off 値以下で、また各種ホルモン検査ではtestosteroneのみ4.7ng/mlと著増を示した。治療は左付属器摘出ならびに右卵巣楔状切除が行なわれた。[考察] 報告された8例中2例は両側発生で自験例を含め5例は片側発生であった。発症年齢は本症例を含め2例以外は全て閉経後に発生している。卵巣間質性Leydig細胞腫瘍は、肉眼的には充実性腫瘤を形成する2cm～5cm大の腫瘍で、断面は多結節性で黄白色ないし白色を呈する。顕像はH-E染色でminor sexcord elementを含む症例も報告されているが、一般にこの腫瘍は2つの細胞成分よりなり、大部分は莢膜細胞に類似の錯走する紡錘型細胞の増成の中に、島状に黄体細胞類似のステロイドタイプ細胞集団が散在している。その胞体内にReinke結晶を認めることがLeydig細胞であることの条件とされている。顕像では、Leydig細胞はミトコンドリア、滑面ならびに粗面小胞体、ライソゾームが豊富で、ときに脂肪滴やReinke結晶成分を含む。本症例は以上に合致し卵巣間質性Leydig細胞腫瘍と診断した。尚、テストステロン抗体を用いた特種染色では腫瘍細胞細胞質に陽性であった。本腫瘍は良性であり、これまで手術後の症例において転移、再発の報告はない。

P-184 多重スペクトル手法による卵巣腫瘍
MRI画像のカラー表示

大阪市立大

前田岳史, 金岡 靖, 荻田幸雄

[目的] MRIは、測定条件によって多様な画像が得られることが特長であるが、信号強度分布はそれぞれモノクロ透過画像としてフィルム上に表示される。そのため臨床上有用な情報を抽出するには複数のモノクロ画像を比較検討する複雑な精神的作業が必要である。そこで、MRI画像を多重スペクトル画像とみなすことにより各組織の信号特性を一枚の画像上にカラー表示し、卵巣腫瘍のMRI診断を精密かつ簡単にすることを試みた。[方法] 卵巣腫瘍患者の同一断面のMRI画像をフィルムスキャナーでパーソナルコンピュータへ256階調のRGB (red-green-blue) 画像として取り込み、T1強調画像はR:G:B=255:127:0、T2強調画像はR:G:B=0:127:255に濃度階調変換した後、各カラーチャンネル内で加算して、一枚の加算混合画像を合成した。MRI画像の撮影はSigna 1.5T(General Electric Co.)を用い、撮影条件はT1強調画像、T2強調画像それぞれTR=450～566.7ms, TE=11～12ms, TR=4000～4500ms, TE=130～136msとした。[成績] 卵巣癌の実質部分は褐色、漿液性卵巣腫瘍は青色、皮様嚢腫の脂肪は淡黄色、チョコレート嚢腫は暗橙色に表示された。カラー画像上で、各組織および腫瘍内容をきわめて容易に識別できた。[結論] T1強調信号とT2強調信号が一枚の画像上にカラー表示される結果、診断に必要な情報を抽出するために両画像を比較検討する必要がなく、本方法は卵巣腫瘍の精密なMRI診断を下す上できわめて有用な方法であることが明らかになった。